

本田由紀 著『「日本」ってどんな国？－国際比較データで社会が見えてくる』  
ちくまプリマー新書（2021年）

本書では、生活に関わる社会領域のデータを示しながら、国際比較を通じて日本の特徴が分析されている。簡単に本書の内容を紹介したい。第1章では「家族」を取りあげている。官庁統計から日本の一人暮らしや夫婦だけの世帯が増加していること、離婚率も高まり家族の維持も難しくなっていることが示され、日本の家族の形の変容が分析されている。

第2章では「ジェンダー」を取りあげている。国際比較データから日本の際立つ問題としてジェンダー面での不平等が分析されている。女性活躍が実現できない理由として、男性・女性の区分を強調する「ジェンダーステレオタイプ」が指摘されている。

第3章「学校」では、日本の学校教育の特徴が取りあげられている。15歳の生徒の国際比較データによると、日本の学力は高い一方で、学習への楽しさ・動機づけ等は低いことが示されている。別の国際比較データから、学習への楽しさ・動機づけ等が低い要因を分析すると、日本の授業に特徴が見いだされ、一クラス当たりの生徒数の多さ等を背景として、個々の生徒に対する細かいフォローが少ない点が指摘されている。

第4章「友達」では、友達との関係をめぐる状況が取りあげられている。13～29歳の男性在学者の国際比較データから、日本の特徴として、まじめな男子は友人が少なく、運動が得意な男子は友人が多いことが示されている。こうした個人特性による交友範囲等の差が「スクールカースト」につながっていることも分析されている。

第5章「経済・仕事」では、世界標準からみた日本の働き方・働かせ方における異様な側面として、長時間労働や正社員と比べた非正規社員の賃金の低さが指摘されている。また民間企業に勤める30～49歳の大卒以上の男女の国際比較データから働くことに対する意識をみると、仕事や会社に対する積極性や熱意が低いことが日本の特徴として示されている。

第6章「政治・社会運動」では、日本人が政府に対して何を求めているのかをみている。国際比較データから、日本は「医療の提供」や「住居の保障」など11個の項目のうち9項目で政府の責任と見なす度合いが低いことが示されている。

第7章『「日本」と「自分』』では、日本という国との中で生きる自分との関係が分析されている。自分自身についての考え方には国によって明確に違いがあり、例えば日本の若者は生きることの意味や自分自身についての否定的な感じ方が強い一方、偉い人には従うべきという権威主義的な考え方が近年上昇していることが示されている。

本書を通じて、国際比較からみた日本の現状を把握することができる。本書で取りあげられている日本の課題は簡単に解決できるものではないが、先に進むためにも客観的なデータを用いて厳しい現実を知ることがまずは重要であると実感した。（中川 敬士）